



第1回

なぜ歴史総合なのか

監修・講師 川島 真

学習のねらい

第1回は「歴史総合」の意義を理解することがねらいです。18世紀以来の歴史を、まずは「私たち」の身近なところから問いを作って学ぶこと、また日本史、世界史を分けずに全体として学ぶこと、近代化、(国際秩序の変化や)大衆化、グローバル化という三つの大きなテーマを設定して学ぶこと、そして現代的諸課題から考察を加えることがその大きな特徴です。

「私たち」の視点と歴史

歴史など勉強なくていい、そう思う人もいるでしょう。しかし、「私」自身や「私のまわり」の事物や現象について考えるとき、それらには歴史的な背景があり、そのようになっていることを意識してみてもいいでしょう。「私たち」は歴史の中の当事者です。当事者として、身近なところから学びのきっかけを見いし、問いを設定して歴史を考えてみてみませんか？ 今回取り上げるカレーはその一例です。ただ、現在とつながっているもの、現在に残っているものだけが歴史的に重要だというわけではありません。その時々大切にされたものでも、技術革新などにより姿を消したものもあります。問いを大切に、文字だけでなく、画像や統計などの資料を調べることで、その根拠から何が言えるのかを考え、その言えることを組み合わせながら、歴史を考えてみましょう。そして、教科書の叙述も同じように多くの資料に支えられた根拠に基づいている、という視線で読み返してみてください。

日本史と世界史との融合

「歴史総合」は18世紀からの歴史を対象に、日本史と世界史とを分けずに学ぶ科目です。18世紀から学ぶのは、西欧が勃興する以前の世界を踏まえるためです。世界的には清王朝やユーラシアの諸王朝が栄え、また日本では江戸幕府の時代にあたる18世紀から学ぶことにより、19世紀以降だけを学んで西欧中心主義的な歴史観に陥るのを防ごうという狙いもあります。また、日本史と世界史とを共に学ぶことは、この時代の学習として理にかなっています。この時代には、次第に世界の一体化が進行し、日本など各国、地域と世界とが強く結びつきま

このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

した。もちろん、国・地域内部の論理や、内部の多様性もありますが、そうした多様な論理が幾重にも結びついて世界が形成された時代が近現代だと言えます。ですので、日本史と世界史とを一緒に学ぶことこそ有効なのです。その際に重要なのは、日本と世界との関係性やつながり、またいろいろな国や地域などとの比較、すなわち関係性と比較でしょう。

三つの歴史の流れと現代的課題

「歴史総合」は必ずしも通史になっておらず、19世紀の近代化、20世紀前半から半ばまでの（国際秩序の変化や）大衆化、20世紀後半以降のグローバル化という三つの大きなテーマが設定されています。注意すべきは、この三つはそれぞれ重なりながら現在にもつながっているということです。そのありようは国や地域ごとに多様です。今回はカレーを例にしていますが、三つのテーマはどう取り上げられていましたか？ また、この三つが折り重なりながら現在にも及んでいるからこそ、「平等・格差」「自由・制限」「開発・保全」「統合・分化」「対立・協調」など、現代社会が直面する諸課題について考える際にも、歴史を踏まえて考えるということが必要になります。これは、現在から過去を照射して歴史を学ぶということではありませんが、今回のカレーであれば、最後の移民と出稼ぎ労働の話などが現代的課題にかかわるかと思います。それをどう歴史を踏まえて考察できるか、考えてみましょう。